
悪魔のドルチェ

雀羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔のドルチ^ヒ

【著者名】

雀羅

【あらすじ】

そここの貴方や貴女、悪魔のドルチ^ヒと云ひ名の詩は如何でしょう。
各種取り揃えておりますので、是非ご来店下さいませ。

甘い蜜

私は愛するものに依存してしまつ
そのことに、いつも困らされてきたの
そこで私は考えた

離れられないのならば
無理にでも
離してしまえば良い

最初はお気に入りの本を燃やした
：確かに、小学校5年生のとき
本が、私の大好きな本が炎の中で踊つていて
悲しい反面、安堵感もあつた

しかし、その灰に固執してしまった
それを母親に見られてしまい
氣味悪がられ
川にぶちまけられてしまった

そのとき私は思い付いた
水に沈めたら、

何も残らない

次に気に入つてしまつたものは石、だつた
だから沈めた

浮かんでこなかつたから

私は満足した

それから、色々なものを沈めてきた

ゲーム機、携帯電話、テニスラケット、時計…

そして今、私は最後に

一つのものを沈めてきた

これで最後

やつと、誘惑といつも毒の抜け方を知ることができた

そろそろ、陽が上る

そこで人々は見るでしょう

私を誘惑させ続けたものを

それは、

貴方というモノと、

私の肉体というモノ

* * 後書き* *

ちなみに雀羅は、このようなことはしておりません。

友人に尋ねられたので、誤解を受ける可能性があるのならば、と思
い宣言しておきます。

まあ、この行為が悪いとは言いませんが。

私は寧ろ、そのまま依存してしまうタイプですので正反対、と言つ
ても差し支え無いかもしませんね。

このような文字潰しにまでお付き合い下さった方に、感謝の念を。

それではまた、歯車が不協和音を奏で出すまで…。

躊躇、虚しい

嫌悪というものは
人間に与えられた
最も至福な感情の一つ

嫌つて嫌つて嫌つて
憎んで憎んで憎んで

そして終には

嫌わざには生きていられなくなる
憎まずには生きていられなくなる

離れられなくなるの
嫌悪することによって生まれ出でてくる蜜の味を
覚えてしまつから

もしも、もしも本当に心から憎みたいのなら
見なければいい

そのもの自体も、そして憎しみすらも
消せばいい

その存在を、自身の心の中から

好きと嫌いは表裏一体

都合のいい言葉だとおもつていたけれど、
案外本当のことかもしれないわ

* * 後書き* *

実はこの作品は、ダークな詩の書き方を忘れた雀羅のリハビリから生まれ落ちたものです。

ダークな詩の終わり方すら忘れた私は、友達に見せる際、こんなことを書いていました。

『ああああ、真っ暗な詩の書き方忘れた！

まあ、馬鹿と天才は紙一重、なんて言つし、そんなもんですよ多分。あれだよあれ、いやよいやよも好きのうち、みたいなさ　あの、帶くるくるくるー、ああれええ々々つてやつだようん!』

……くつ（遠い目）

友達に、後半部分をとてつもなく突つ込まれました。

なにそれアホじゃんアハハハハー！的な感じで。もう一人は、

「わ、わかる…よ！」なんてフオローしてくれましたが。先の友達にすべてを吹き飛ばされた感は、どうしても否めませんでした（再び遠い目）

か、漢和辞典…じゃない閑話休題。それではまた、歯車が壊れるまで…。

#あてこり

私は、生きてこむの?

そんな思いが毎日渦巻いてこむ

笑っているから?

… そんなの、仮面を付けてこむのだから理由になんてならないわ
田を見ることができるから?

… 私はあなたの田を見つめながらも何時も遠くを見てこむ気がするわ
泣くことができるから?

… もうね、心が傷つくのだもの

けれど一時期は泣くことができなかつたわ

その時私は何だつたのかしら

わからない、
わからないわ

誰も教えてくれないの

だつて誰も知らないから

私は、いろんなものを隠しそぎたのね

私はいつか、心から笑うことができるのかしら
相手の目を見つめることができるのでしたら

泣くことはできるようになったの

だから、だからきっと…。

はやく、生きていると実感したいわ

* * 後書き* *

これは、雀羅の所属する放送委員会の同学年の男の子と話している
ときにふと思つたことを、言葉にしてみた作品です。

私は極度の人見知り（恥ずかしがり屋）で、仲は良いはずのその人
の目を見て話すことができませんでした。たとえ見たとしても、そ
の人の目を通り越した所を見ていたり。

その人は、ちゃんと私の目を見てくれているのに。

今はもう、その人は全く怖くなんてありません。目を見て、笑うこともできます。

涙が出なかつた、といつることもありましたね。どれほど辛くても、泣くことができませんでした。泣いたら楽だと、わかつていたのに……。

しかし、ある日のこと。私は夜横になつて、携帯を使用し小説を読んでいました。

なんとなくあつた、『悲恋』といつジャンルの物語。

お察しの通り、わんわん泣きました。布団を噛み締めなければ嗚咽がもれる程、数年ぶりに。

嗚呼、字数埋めとはいへ、少々後書きが長すぎたようですね。それではまた、運命といつ歯車が絡み合えば……。

受け入れて、

タツ タツ タツ タツ

私は走る。闇の中を走る。まるで何かに追われているかのように走る。

嗚呼、もう辺りは真っ暗だ。こんな暗闇、見たことがない。今日の空は、そう言われてみると確かにおかしかった。

朝は、まるで泣き出してしまいそうな雲の色だったの。鈍い、とてもなく鈍い灰色で、私は一瞬外に出るのを躊躇つたものだ。

昼は、とても明るかった。今朝の雲は何処へいったのかと不思議に思うくらい、光で満ち溢れていたわ。
もしかすると、それもおかしな空の動きの一いつだつたのかもしれない。

夕方、気付くと空は真っ赤に染まつていて。太陽なんて見えないのに、雲が血に染められたように赫かつた。空気も、浸透していくよう赤くなつてゆき、幻想的な風景になつた。しかし私は、その幻想が恐ろしくて恐ろしくてたまらなかつたの。

そしてその後すぐに、真っ暗になつた。闇が迫つてくるような気がして、私は恐怖を覚えて走り出したのだ。

だが、走る途中で気付いた。否、気付いてしまつた。空は、人間と同じなのだということに。

辛いことがあって、朝は憂鬱で。昼は皆に心配をかけまいと空元氣を出し、友達も明るくなるように暖かく接してくれる。しかし夕方になると、不安が込み上げてきて友達の存在を震ませてしまう。そしてその辛さから血を流してしまつのだ。夜は不安に潰される。もう駄目だと思い、自分を必要以上に責めてしまつ…。

そこまで考えた時、私の足は止まつた。人間と同じであるならば、受け入れなければいけない。潰されてしまいそうなならば、支えなければいけない。

そして振り向き、闇へと、足を進めた。

私の存在は消え、空の支えとなつた。

取り、込まれた…。

前を向いて

そんなんじや
真実だつて見えないよ

何を言つても

コレ嫌い
アレは嫌だ
ドコがいいの
わかんないなー

そんなんじや

好きな物が
無くなっちゃう

好きな物を
忘れちやう

好きな物も
嫌いって言つちやう

あなたがそう言つ隣に
ソレが好きな人が
ホラ、呴いてる

何がいけないの

好きだと言ひ出せば
眉を寄せながら
心を枯らしながら

前を向いて

コレが好き
アレもオススメ

そんな言葉で
毎日が幸せになる

心が潤つ

だから、だからね
嫌いなんて容易に
言わないで

* * 後書き* *

ある子を見ていて、思つた」とです。
雀羅がこんな前向きな詩を書くことは珍しいのですが、ね。

性格が酷いわけではないのですが、会話を聞いていると上記のよう
なネガティブな発言ばかりしているのです。少々、端から聞いてい
て寂しい思いをしました。

気付いたら鉛筆が動いていたというホラー（…）

まあ、雀羅自身もポジティブなわけではないけれどね。内に溜
め込むタイプなので、質は悪いかもしません。取り扱いには『注
意を！（…）』

そういえば、B-Nさんの歌に、この詩の内容のような歌詞があり
ひどく驚きました。と同時に嬉しくもなりましたけれどねうふふ
雀羅も、前向きに生きていってみたいものです。

このような戯れこまでお皿を通していただき、ありがと「び」やこま
した。

それではまた、歯車の鏽が取れ出した頃にでも…。

ソレは所謂

一步一歩ゆっくりと、硬く脆く、ぱりぱりなソレを踏み締める。ソレは所謂、階段といふものらしい。

しかし何故だらう。

階段とは、上の階に行くことを明確な目的と掲げるものではなかつたのか。

少しずつでも上に近付いてみると実感するためのものではなかつたのか。

この階段は上に行けば行くほど、足を動かせば動かすほど、出口の無い迷宮の中を彷徨つていると感じさせるのだ。

鳴呼、此の迷宮の出口とは何処にあるのだらう。そして入口は何処にあつたのだらう。

入口から離れてこつこつと、この感覚はあるところに、出口に近付いてこらへるといつ気持ちにはどつしてもなれな。

唯だ、奥へ奥へと進みゆくだけなのだ。

そこへ、小かな、ほんの小さな違和感。

恐怖が、慟哭が、哀しみで満ち溢れた咆哮が五感を震わせる。

ソレ 階段といひついで 大きく揺れ動き、片膝を付く。

だが、這つて上へと向かつ。

理由はない。思い付く余裕もない。

行かなければ、という本能のよつなものが頭の中を占めている。頭蓋骨がキリキリと音を立てる。

本能に対し、思い出すなど理性が張り合い頭が締め付けられる。

行け、思い出すな、思い出せ、行くな、：

階段を昇り切つて頂上から地上を見下ろし、そして全てを思い出した。

同時に地面へと崩れ墜ち、一筋の泪を流す。

昇っていたのは唯だの建物の唯だの階段などではなく、闇ぞされた私の心の出口へと続く先の見えない螺旋階段だったのだ、と…。

忍び寄る手

怖くないかい?
嫌じやないかい?
恐ろしくないかい?

近付きたくないよね
触れたくないよね
見たくないよね

じゃあ、せ
逃げよつよ
辞めよつよ
消えよつよ

!!

そんなことやめた方がいい
そんなことをして傷付くのは君だよ
あいつらは何も傷付かない
ただ君を嘲笑うだけ

だから、そんな考えは棄てなきゃ
君の心が棄てられる前に

だから、そんな考えは壊さなきや
君の心が壊される前に

お願ひだ、やめてくれ

自分の居場所を見付ける、なんて

自分の存在に気付いてもう、なんて……

* * 後書き* *

ええと、これは確か、皆が忙しくて自分に構つてくれなかつた時に
傷付いて突発的に書いた詩です。

雀羅は、こんな風にリズムや対比を作つて詩を書くのが好きです。
…ただ単に、長文を書くのが苦手なだけでもあるような気がします
が。

短い言葉に、伝えたいことを詰め込むのは楽しいです。詩は俳句と
違い、字数が決められていますし。

まあその御蔭で、後書きを書くのが大変なのですが。

だから、長文をストーリー性を持つて書き上げられる人は尊敬しま
す。

どの田線から書けばいいのか、よくわからないんですよねー…。

『…地球破壊』の連載は、田線を入れ換えることによってどうに
か愉しんで書いています。というか雀羅にタイトルを付ける能力を
下さい(…)

それでは、歯車が軋み出し、動かしたいと切に願い出するの口もで…。

愛シテル

さあ溺れさせてよ

貴方の愛で

もう何も考えられないくらい
思考能力すらも残らないくらい
大きな愛で私を溶かして

そしてその愛で私を殺して
放つておいたってどうせ死ぬの
だから、疾く疾く私を殺して
私は貴方の愛に包まれて死にたいの

そしてもう一つの目的は
私のことを貴方に刻み付けること
これは貴方には教えないけれど

貴方の愛を内側から燃やして
哀しさ、そして憎しみへと育て上げ
私を忘れることができなくしてアゲル

貴方は喜ぶに違いない
だって私のことを忘れずにするのだから

愛より憎の方が感情は強いでしょう？

だから私から貴方への
秘密のプレゼント

さあ溶かしてよ、殺してよ

貴方の愛で、私のことを

溶かしてアゲル

刻んでアゲル

私の不純で純粋な愛で

貴方の優しい愛を

* * 後書き* *

…あら？じゅ、純愛ラブポエムを書こうとしていた筈なのですが、
何処でどう間違えたのでしょうか。

最初の2、3段落までは大丈夫でした。

なのでおそらく、もう一つの目的＝秘密の目的＝倫理的に…な目的
＝狂愛なんていう式が成立してしまったのでしょうか。

自分の思考に乾杯

狂愛は、書くのは大好きです。ある方に影響を受けまして。
ただ、そんな様には絶対に愛されたくないですね。だってめんどく

それでは、歯車が砕け壊れ散り散りに為つてしまひやの日まで。
それでは、歯車が砕け壊れ散り散りに為つてしまひやの日まで。

ね？

自己愛ラブソニー

私は貴方に真実を伝えない。だって伝えたら、貴方は壊れてしまう。
こんな残酷な真実を知るのは、未だ私だけでいいの。それまでは貴
方には、甘い甘アい優しい嘘を吐いてあげる。

貴方が今虐めいたぶり残虐非道なすべてを尽くしているその娘が、
実は全くもつて清廉潔白で何も悪いことをしていないなんて知った
ら、貴方は傷付き動哭し自らで自らを責めそして壊すでしょう。

私があの娘に酷いことをされたなんて言ったから、貴方は私を守る
ために、全力でもつてあの娘を潰そうとしてくれている。

だから私は、貴方に嘘を吐き続けるの。

私は貴方を守るために、優しい優しいヤサシイ嘘を吐くわ。

最初は貴方もあの娘も悲しみのどん底に突き落とす予定だったけれ
ど、貴方の騎士^{ナイト}ぶりを見て考えを変えてあげたわ。

なんてなんてヤサシイ私！

最初は残酷な嘘を吐いたけれど、それ以降は優しい嘘なのよ。だっ
て貴方が思つた以上にあの娘を突き落してくれたのだから、ヤサ
シイ私はご褒美をあげなくけや。

だから本当に極上のご褒美は、一番最後にとつておこう。そのご褒
美は、自分へのモノなの。
ヤサシイヤサシイ嘘を吐き続けた私へのご褒美。

私への「」褒美は、私の騎士となつて動く貴方への「」褒美になるはず。だつて私の手足なのだから、喜びだつて同じでしょ？だから最後に、とつておきの「」褒美を私と貴方にあげるの。

それは残酷な真実を貴方に伝えることができるといつ「」褒美。悲しみの底なんかより地獄の底なんかよりもっとヒドイトコロ「」、突き落としてアゲル。

存在意義なんて

さあ始めよう
夜闇に隠れた
その宴

さあ終わらうか
朝日によけられた
その宴

さあ始めよう
陽の光に見つけられた
その宴

さあ終わらうか
漆黒の迫ってきた
その宴

嗚呼 何と云つことか

始めようとしても
始まらぬ

終わらうとしても
終えられぬ

悉く失敗させられるのだ

こんなにも邪魔をするのは
何の仕業か

どうしてでも我等は
宴を始めねばならぬ

考えり、考えり

闇を創るは誰の仕業か

光を創るは誰の仕業か

宴の目的は
その者への侮辱の為へと
変わり果て

元の目的などは消え薄れ

その者無くては
存在できぬようになり

そして
我等は
所謂

【悪魔】

と呼ばれる
ようになった

その者が、神が先に存在し
絶対の権力を持ち
光を創造した

唯だそれだけのために
我等は悪と見做されるようになつたのだ

* * 後書き* *

天使と悪魔について考えていると、ふと気付くとこのような思考回路になつてきました。

悪魔は、天使が居なければ存在しなかつたのかもしれません。
天使に反してこそ、悪魔と云うモノに存在価値を見出だすことが出来るのでしようから。

私は、天使より悪魔の方が好きだつたりします。悪魔の方が、天使よりも現実を見ているような気がしますし、私自身悪魔側の人間でしうから。

それではまた、歯車が悪意で漆黒に染め固められたときにでも。

僕だけのモノ！

噫、噫、どうしたことだろー！

如何して貴女の手は震えているの

如何して貴女の唇は噛み締め合っているの

如何して貴女の足はすくんでいるの

如何して貴女の膝小僧は笑つているの

如何して貴女の目尻には水滴があるの

如何して貴女の目は強く閉じられているの

如何して、貴女は、僕の手を取ってくれないの！

僕にあの小さなカワイイ手を見せて

僕にあの真紅のウツクシイ唇を見せて

僕にあのすらりとしたキレイな足を見せて

僕にあの丸いカワイイ膝小僧を見せて

僕にあの切れ長のウツクシイ目尻を見せて

僕にあの澄んだキレイな目を見せて

僕の、僕の、そう僕だけの手を取つてよ！

早くしないと、貴女のカワイクテ、ウツクシクテ、キレイな手が唇
が足が膝小僧が真っ赤に染まっちゃうよ。

だって僕の、僕だけのものじゃ無いんだつたら壊して征服して僕だけのものにしてなくちゃいけないからさ。

早くしないと、貴女の田尻にあるよくわからない水滴が真っ赤になつちやうよ。

だって、僕がよくわからぬものが貴女に付着してゐるなんて許せないから、僕だけがよく知つてゐる色にしなくちゃいけないからさ。

早くしないと、貴女の澄んでいたはずの田を潰しちやうよ。だって、

僕を、僕だけを見ない目なんていらぬからさ。

僕を見る目に恐怖が浮かんでゐるなんて絶対に絶対にゼッタイに認めることがなによつにしなあや！

僕だけのモノ！

噫、噫、どうしたことだろー！

如何して貴女の手は震えているの

如何して貴女の唇は噛み締め合っているの

如何して貴女の足はすくんでいるの

如何して貴女の膝小僧は笑っているの

如何して貴女の目尻には水滴があるの

如何して貴女の目は強く閉じられているの

如何して、貴女は、僕の手を取ってくれないの！

僕にあの小さなカワイイ手を見せて

僕にあの真紅のウツクシイ唇を見せて

僕にあのすらりとしたキレイな足を見せて

僕にあの丸いカワイイ膝小僧を見せて

僕にあの切れ長のウツクシイ目尻を見せて

僕にあの澄んだキレイな目を見せて

僕の、僕の、そう僕だけの手を取つてよ！

早くしないと、貴女のカワイクテ、ウツクシクテ、キレイな手が唇
が足が膝小僧が真っ赤に染まっちゃうよ。

だって僕の、僕だけのものじゃ無いんだつたら壊して征服して僕だけのものにしてなくちゃいけないからさ。

早くしないと、貴女の田尻にあるよくわからない水滴が真っ赤になつちやうよ。

だって、僕がよくわからぬものが貴女に付着してゐるなんて許せないから、僕だけがよく知つてゐる色にしなくちゃいけないからさ。

早くしないと、貴女の澄んでいたはずの田を潰しちやうよ。だって、僕を、僕だけを見ない目なんていらぬからさ。

僕を見る目に恐怖が浮かんでゐるなんて絶対に絶対にゼッタイに認めることがなによつにしなあや！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4655d/>

悪魔のドルチェ

2010年10月11日01時58分発行